

「体育とジェンダー ―ジェンダーの視点から体育授業を見てみると―」

佐野信子（立教大学社会学部専任講師）

はじめに

あなたが経験してきた体育授業。どのような思い出があるだろうか？

平成元年の学習指導要領改訂まで、長らく、中学校、高等学校の体育では男女で異なる扱いが明文化されていた。また、平成元年の改訂でその明文化が解消された後も、整列や練習の順番などで「男子は先、女子は後」といった暗黙の序列化、グループ活動は男女別といった必ずしも必要とはいえない男女区別が今でも多く見られる。このような性格を有する体育はジェンダー研究の中で悪者扱いされてきた嫌いがなくもない。

スポーツを主たる教材とする体育授業では、スポーツ、特に競技スポーツの論理がまかり通り、オリンピック競技のほとんどが男女別で行われること等を引き合いに、「男女一緒にの授業は主に男女の体力差から無理」との声も根強く残る。そのような理由から現在でも男女別習授業を実施する学校も少なくない。しかし、教育の一環である体育と競技スポーツとは独立すべきで、まして競技スポーツの論理に体育が飲み込まれるべきではなく、学習者がその性別にかかわらず、潜在的な能力を引き出すことを保障すべきと考える。

勿論、男女共習（混合）授業にもメリット・デメリットがあり、同時に、男女別習授業にもメリット・デメリットがあることを確認した上で、筆者はジェンダーの視点に立つ男女共習授業が望ましいと考え、セッションでは自ら撮影したビデオ資料や過去に実施した調査結果を発表し、ディスカッションの話題を提供した。

ジェンダーの視点からみた体育授業の問題点

1) ある公開研究会の授業風景から

中学1年生の器械運動（マット運動、跳び箱）の授業であった。様々な学習の場が用意されている中で、女子は一ヶ所のマットに集まり、皆が皆、倒立をしていた。一方の男子は、思い思いの場で自分の欲求にあった運動に励み、グループでというよりは個人個人での活動がみられた。教師から男女にそのような指示が与えられていたわけでは勿論ない。生徒自らがそのように振舞っており、これまでに観察した他の学校でも似たような傾向が認められ、この現象はこの学校にとどまらず、広くみられるのではないと思われる。

2) 授業前の一風景から

体育授業直前の休み時間に男女がどのような行動をとっているか、ビデオ資料を通して男子生徒と女子生徒の動きに注目してみた。

①ビデオ1 ある北国の学校で冬季に行われた授業前の休み時間。三々五々体育館に到着した男子は授業用に準備されたバスケットボールを手に思い思いに遊び始めた。一方、女子はジェットヒーターの前に固まり、そこから動こうとしない。

②ビデオ2 バスケットボールの授業風景。教師によって設けられた3つの学習の場がある中で、女

子は初心者用に設けられた一ヶ所に固まり、高い能力を有する者も自分の能力にあった学習の場には行かない。男子は初心者用の学習の場で活動する者の他、レイアップシュートやジャンプシュートなど、自分の能力や興味にあった学習の場に分かれていく。

なぜジェンダーの視点に立つ男女共習が必要なのか？

上記に示した体育授業の現状は、生徒の意識にジェンダー・バイアスが強く、また、端的には男女別習授業の実施といった男女区別が当たり前の環境の中でそのバイアスが強化された原因によるのではないかと考えられる。平成11年6月に施行された男女共同参画社会基本法の前文では、性別にかかわらず個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現が21世紀の我が国社会を決定する最重要課題と謳われている。そして、それと同時に生涯スポーツ社会の実現が望まれてからも久しい。しかし、上記に紹介した現状が少なからぬ学校でみられる中、この男女共同参画社会の実現、生涯スポーツ社会の実現という二つの時代の要請からは、ジェンダーの視点に立った過度に性別にとらわれない男女共習授業実施の必要性が生じてくると考えられる。しかしながら現状では、「男女共習」の名のもとに行われながらも、男女で異なる達成課題や評価基準が設定され、グループ活動も男女別といった闇雲に男女を一緒としただけの、ジェンダーの視点からみると多くの問題を含む体育授業も残念ながら少なからずみられる。

男女共習授業の実態（1）—青森県内中学校の体育授業調査結果から—

実施時期は、平成15年12月中旬～平成16年1月下旬。対象は、中学校185校（保健体育科主任に回答を依頼）、保健体育科教諭412名（男性68.6%、女性31.4%）。

1) クラス編成、カリキュラムについて

次のような質問を試みた。「必修の体育（実技）授業について伺います。主なクラス編成は男女混合ですか、それとも男女別ですか。また、カリキュラムは男女同一ですが、それとも『女子はダンス、男子は武道』など性別によって履修内容を指定していますか。」

クラス編成は、学級別の男女共習（混合）クラスを採用している学校数が最も多いものの（42%）、その次には同学年複数学級合同の男女別クラス（20%）が続いている。また、詳細に検討すると、学校規模が大きくなるほど同学年複数学級合同男女別クラス採用の回答が増える傾向にあることが分かる。従って、学校規模の関係で男女別クラスを設けることのできなくなった学校が、男女混合クラスを採用しているのではないかと推察することもできる。

カリキュラムについては、男女同一カリキュラムを採用している学校が4分の3である。その一方で、5校に1校は男女別カリキュラムを採用しており、それらの学校では現在でも性別によって異なる履修内容が続いている。

2) 男女共習に関しての教師の意識

「必修教科の体育授業で男女混合授業を行うことに賛成ですか、反対ですか。その理由も教えてください。」との質問を試みた。その結果は、「どちらとも言えない」との回答が約半数であった。「賛成」と「反対」とを比べてみれば、賛成が3割強、反対が2割弱との結果である。次にそれぞれの回答について代表的な理由を記してみる。

<賛成>学級単位での指導が可能になるから。これからの生涯スポーツの視点から。お互いのよさや弱点を理解できる。

<反対>男女の能力差。体力差。別習の方が体力、運動技能ともに質的な高まりが大きい。

<どちらとも言えない>領域、種目等による。混合で実施のよさと別習での良さがある。

ここで特に注目しておきたいのは、賛成の理由として挙げられている「お互いのよさや弱点を理解できる」という回答である。これは、男女特性論に立った考え方と思われ、真の性別にこだわらずに各自の能力を伸ばすという男女共同参画の理念とは乖離している。本調査に限らず他の調査等でも、男女共習に対して賛成とする意見には、この男女特性論に結びついた回答が少なからずみられ、「賛成」か「反対」かを聞くにとどめるだけでなく、その真意までも尋ねることの必要性が再確認できる。

その他の質問として、男女共習と男女別習の両形態の授業を実施した教師に、それぞれの授業での指導の難しさを、女子、男子、それぞれについて尋ねてみた。

結果としては、男子では、男女共習授業の時に指導の難しさを感じる教師が40%、どちらとも同じが44%、女子では、男女共習授業の時に44%、どちらとも同じが38%であった。このように男女共習授業の指導に難しさを感じる教員が少なくないことから、男女共習形態での授業方法に関する研究の進展が望まれる。

男女共習授業の実態（2）－体育の男女共習に関する中学生の意識調査から－

平成14年11月～12月にかけて、中学1年生、中学2年生、各10名ずつ（男女数半々）を対象にインタビュー調査を実施した。そこから生徒が持つ男女共習に対する積極的な意識と消極的な意識をひろってみた。女子の意識の中には、男子と一緒に授業だと「自分でやらなくなる」など体育授業においてあたかも女子が「第二の性」としての存在になってしまうなど、興味深い結果が得られた。詳細は、参考文献佐野（2003）参照。

まとめにかえて

筆者はこれまでジェンダーの視点に基づいた男女共習授業を成功させるための試みとして、a) ジェンダーに関する講義、b) 習熟度別グループ設定、c) スキルチェックテスト、d) 少人数制指導を実施してきた（詳細は、佐野（2004）、佐々木ほか（2004））。しかし、未だ手探りの状態であり、実施校も少なく、多くの学校での汎用に耐えるためには諸外国の事例等も参考にしながら今後も更なる検討が必要である。

冒頭で述べたようにジェンダー研究において、男女差を当然とする体育はこれまで悪者のように扱われてきたように思われる。だが、体育は体を丸ごと用いる教科であるだけに、そこで学習者が技能差は男女差よりも個人差での開きの方が大きいことに気付き、一人ひとりが男女という枠を越えて活動できるようになった時、体育は教育におけるジェンダーの問題を解決する牽引役となる可能性を秘めているのではなかろうか。

<参考文献>

佐野信子（2003）体育の男女共習に関する中学生の意識．弘前大学教育学部紀要、89：131-139.

佐野信子（2004）一人ひとりの体育的学力を伸ばす体育授業の在り方について－本学附属中学校での実践から－．弘前大学教育学部紀要、91：45-49.

佐々木淳治・大友啓文・成田雅子・笹森美子（2004）保健体育科．弘前大学教育学部附属中学校教育紀要、32：124-136.